



1922 年結婚当時



1922 年アメリカ・シカゴ美術館前で



1922 年 8 月辛酉学年の留年した同級生とアメリカ・シアトルに上陸した時（前列左から三人目）



1928 年武汉大学文学院院長時代



1935 年聞一多、梁実秋、顧毓琇、呉景超、余上沅等と大同
に遊ぶ（右から三人目）



昆明の福寿巷の自宅前で 三男聞立鵬、長女聞名とともに



1939 年春、学生の抗日戦争劇
上演の時



1939 年 8 月昆明西山に遊ぶ



1943 年 5 月 昆明にて学生演劇の
舞台設計をした時



1945 年 春、石林にて



抗日戦争に勝利後髯と剃り落
とした聞一多



篆刻作業時の聞一多



1946 年「新華日報」を閲読中
の聞一多



1946 年昆明西蒼坡の西南聯合
大学教員宿舎の前で



夫人の高孝貞（後に高真と改名）と自宅前で



1946 年夫人とともに



音楽家趙風とともに

『聞一多伝』 日本語版序

聞黎明君の『聞一多伝』の中国版が出版されてすでに五年になる。現在、日本の早稲田大学鈴木義昭教授が日本語に翻訳中で、まもなく上梓されることになっている。誠に中日文化交流史上、称賛に値するものである。

聞一多先生は、私の学問上の恩師であるとともに、人生の恩師でもある。三十年代の初め、聞先生が清華大学で中国文学を教えておられる時、私はその隣の燕京大学社会学部で社会学を専攻していた。そして、私の指導教授の呉文藻先生は聞一多先生の親友でいらつしやった。後に、私は清華大学大学院に転じ、潘光旦教授の教えを受けた。潘先生も聞一多先生の親友でいらつしやった。前々から、私は聞一多先生の詩集『紅燭』『死水』を読んではいしたが、潘、呉両先生がよく聞一多先生のお名前をお出しになったため、先生に対する敬意がますます深まることになった。

しかしながら、聞先生と本当にお近づきになったのは、抗日戦争が勃発して昆明での民主運動に参加した時のことである。抗戦期の後期、潘先生と聞先生は西南聯合大学の西麓坡の宿舍に住んでおられ、しばしば潘先生のお宅をお尋ねした時、聞先生ともお目に掛かるようになった。当時、潘先生と聞先生は、華崗が作った「西南文化研究会」に参加されていて、私にもそれを聞きに行くよう勧めてくださったおかげで、私もその中の一員となることができた。研究会の先生方が民盟に参加される時、私も自然に民盟に加盟したのだ。抗戦の勝利の前後、雲南の民盟は様々な活動をしていたが、中心はいつも聞先生であり、我々の目から見て、真の「指導者」であった。その後、聞先生が国民党に暗殺された時には、親戚同様の気持ちになっていた。当時の状況については、聞黎明君のこの伝記の中にすでに書かれているとおりである。恐らくは、そうしたご縁から、聞黎明君は私に本書の序を書くよう求めたものである。私自身もいくつかお話しした

いことがある。

いち早く聞一多という名前を知ったのは、現代文学の創作者と愛好者であった。その一番目の詩集『紅燭』は、一九二三年九月のことであった。その頃、新文学を鑑賞できる人々はそんなに多くはなかったし、新詩を作る人も多くはなかった。まして、新詩の詩集を出版する人は明け方の星のように寥々たるものであった。

しかし、詩壇における聞先生の位置付けが確立したのは、主として一九二八年に出版された『死水』によるであろう。彼の二番目の詩集は、思想であると技巧であるに関わらず、当時も現在もなお少なからぬ影響力を持っている。以後、先生の精力は中国古典文学に注がれるようになった。陸続として書かれた著作は、独力で新たな道を切り開き、清新な構想を持つ、中国と西洋の融合した学問的特徴により、学術界の重視を受けることとなった。今日に至るまで、古代神話、詩経、楚辞、諸子百家、唐詩を研究する時、論者が触れるか触れないかに関わらず、実際には聞一多先生の成果を利用しないものはないのである。中華民族の秀れた文化遺産の中には、聞先生の努力と貢献とが含まれていると言ってもよいであろう。

中国現代文学史上で重要な成果を上げた学者は非常に多い。それなのに、聞先生の地位がなぜかくまでも突出しているのか。なぜかくまでも独特なのか。私もこのように疑問を持ったことがあった。子細に考えてみて、そこにはやはり歴史の前進の要素が働いているのだと思いつたのである。

抗日戦争が勃発する前、時局が揺れ動いているにも関わらず、象牙の塔に住む大部分の学者たちの生活は、相対的に言って比較的平静であった。盧溝橋での一発の砲声が中国の知識分子をして中華民族の解放闘争の前衛に押し出したのであり、彼らはこれにより広範な人民と呼吸を同じくし、運命を共にし、真に人民の一員となつていったのであった。人民はこの空前絶後の民族自衛戦争の中で覚醒し、知識分子もこの戦争を通

爾来、この一族は、ここで繁榮していく。地名は「聞家鋪」と呼ばれ、宗祠も建てられた。

聞一多の曾祖父は、第十七代の良錡公である。貢生としての名を兆蘭と言ひ、勅命によって文林郎に封ぜられた。代々富裕な家柄ではあったが、一八五三年、太平天国軍が武昌を攻略した時、家はことごとく破壊されてしまった。年末に、良錡公の父、賢錡公が病で世を去った。自らも病にかかり、やむなく代々続けて来た稼業を放棄せざるを得なかった。当時、読書人として、家系を継ぐことができないということは、痛恨極まりないことであつた。良錡公は、「試後、族に捷を報ずる者有る毎に」、「終夜涕泣し^①」た。

聞一多に最も影響力のあつた人物として、祖父の佐達公を挙げることができる。佐達公、名は子淦、字は禧凝、号は香泉、麗生。一八三年の生まれで、七歳の時にアヘン戦争が勃発する。佐達公は幼少の頃、身体が弱く、成人する前に母親を失つた。父親が後添えをもらわなかつたため、家事の全てが一人息子に肩に掛かつた。彼は紀事（実録の類）を読むのが好きだつた。典雅な文章を好んだが、制藝（八股文）は好まなかつたので、科擧の試験ではうまくゆかなかつた。ある年、黄州に赴き、科擧に応じた。試験場では、「孫権釣魚台賦」を作り、折よく視察中の張之洞に才能を見出された。しかし、環境が整つていなかったため、落第してしまつた。家譜は、彼が太学生になつたと記載するが、どのようにして得られたかは記していない。佐達公には、中書科中書衛という官位もあり、通例として文林郎も授けられている。これは、長男の廷炬が恩貢となつてから贈られたものである。

佐達公が科擧に失敗した時、彼の父方の従兄弟たちは相次いで高位で合格していた。一番上の従兄弟の佐

① 聞子淦撰「勅封文林郎貢生先考佩香大人行述」、『聞氏宗譜』第二一卷、十五ページ。

とができる。本書は、聞先生が遂げた思想的な発展の過程を極めて細緻に紹介し、これまで知られなかった多くの事柄を我々に紹介してくれている。これこそ歴史学者が備えていなくてはならない最低限の能力である。歴史というものは、一つ一つの細かい断片から成り立っている。その断片は瓊末に見える。しかし、互いに有機的に結び付かなければ、完全な歴史の輪郭を描くことができない。断片を分断することは、それが生み出された背景を軽視することであり、必要な情報が手に入れないことになる。本書のもう一つの深い印象は、聞先生の人生に対する客観的な記述である。一般的に言って、後人が前賢の伝記を書く時、全部を書くとしてみたり、わざと書かないようにしてみたりすることがままある。本書の作者は、伝記の主人公の最年長の孫であるにもかかわらず、歴史を忠実に描き切ることをもって任じている。それゆえ、聞先生が早い時期に抱いた各種の現実的矛盾、苦悩、思想的な傾向などを一つ一つ真実によって記録している。こうした客観的な態度は歴史学者として必須の基礎的な素質を備えていることを示している。このような態度があつたればこそ、曲がりくねった道を辿った一人の知識分子の真摯な求道の姿を生き生きと描き出すことができたのである。

聞一多は中国現代史上の著名な詩人でもあり、学者でもあり、民主の闘士でもある。かかる傑出した歴史的人物は、世界各国でも注意が喚起され、研究され続けられている。アメリカ、ドイツ、香港、台湾では著書や翻訳が出版されているが、日本でもこの領域で成果が挙げられようとしていることは、誠に喜ばしいことである。聞黎明君の話によれば、鈴木教授は一九二六年七月、日本の雑誌「改造」誌上に発表された聞先生の「春光」の訳詩が日本での初訳であることを論じている。蒲池歙一、石田武夫、金岡照光、今村与志雄、芦田孝昭、秋吉久紀夫の諸学者は、「死水」詩の翻訳、松浦友久教授はその詩論に大きな成果を挙げている。

る。さらに、日本の『詩経』研究家の目加田誠教授は一九四三年の論文で、聞先生の観点を引いている。甲骨文字、金文学者の白川静教授、中国古代史研究家の伊藤道治教授の研究の中には、聞先生の文字学、神話学の成果を取り入れられている。その他、奥平卓教授には五十年代の初めに、すでに聞先生に関する研究論文がある。中島みどり教授は、聞先生の古代神話関係の論文を選んで翻訳し、一九八九年『中国神話』の題で出版した。菊池貴晴教授、平野正教授の歴史学の論著では、聞先生の政治思想とその活動について一章をそれに割いている。今年二月出版された、楠原俊代教授の『日中戦争時期の中国知識人の研究』では、序の中で、この研究は聞一多研究の基礎の上に成立したものであると述べている。また、早稲田大学では、鈴木教授を中心として、聞一多学会を作ろうとする動きがあるとも聞いている。

中日両国の人民の間には、悠久な友好往来がある。学術の成果の相互翻訳や紹介は、必ずや両国間の互いの理解と友情とを強める手助けとなるであろう。私は、両国の学者が手に手を取り合い、ともに聞一多研究の新たな局面を切り開いていくことを心から祈念してやまない。

一九九七年十二月五日

費 孝通

目次

『聞一多伝』日本語版序	1
第一章 家系と幼少期	1
第二章 清華園での活躍	11
第一節 上京して学問を学ぶ	12
清華学校入学／12	
課外補習会／15	
第二節 初期の憂患意識	19
弁論と演説／19	
教育を普及させるために／23	
第三節 「五四運動」の激流に合流して	26
「満江紅」を揮毫する／26	
全国学連に参加する／33	
第四節 芸術により社会を改造する	36
情操教育を宗教に替えることの影響／36	
具象芸術を探求する「ミューズ」／42	
第五節 社会改良の試み	46

上 社／46

校内改良活動／50

第六節

「六・三」虐殺事件に抗議して……………56

テストボーイコット参加と留年処分／56

「反省文」を書くことを拒む／62

第七節

清華キャンパスでの最後の一年……………64

家庭を持つ／64

途中で挫折した被災地での奉仕／69

第八節

初めて詩壇に係わる……………73

しかと新詩の方向を見定める／73

清華文学社／79

第三章 アメリカ留学……………87

第一節

国を離れる憂い……………88

第二節

シカゴにて……………94

シカゴ芸術院の優等生／94

シカゴとアメリカの詩人／97

第三節

文学の花園を耕す……………103

『女神』評論／103